

## P5 口腔筋機能療法を用いて前歯部開咬が改善した2症例

Case Reports of the Anterior Open Bite Improved by Oral Myofunctional Therapy

○中野裕子<sup>1)</sup>、森下 格<sup>2)</sup>、緒方麻記<sup>3)</sup>、落合 聡<sup>3)</sup>

Yuko Nakano<sup>1)</sup> , Tadashi Morishita<sup>2)</sup> , Maki Ogata<sup>3)</sup> , Satoru Ochiai<sup>3)</sup>

(医) 雪ノ聖母会聖マリア病院矯正小児歯科<sup>1)</sup>

(医) 雪ノ聖母会聖マリア病院矯正歯科<sup>2)</sup>

(医) 雪ノ聖母会聖マリア病院小児歯科<sup>3)</sup>

Department of Orthodontics and Pediatric Dentistry, St.Mary's Hospital<sup>1)</sup>

Department of Orthodontics, St.Mary's Hospital<sup>2)</sup>

Department of Pediatric Dentistry, St.Mary's Hospital<sup>3)</sup>

【緒言】当科では、口腔悪習癖の除去、口腔周囲筋のバランスを整えるため口腔筋機能療法 (MFT) を行っている。今回 MFT を行い被蓋が改善した症例を経験したので報告する。

【症例】

Case 1 : 5 歳 7 か月 女児

主訴 : 前歯が咬み合わない

現症 : 上顎前突, 開咬, 吸指癖, 舌突出癖, 慢性副鼻腔炎, アデノイド, 口蓋扁桃肥大

Case 2 : 8 歳 7 か月 女児

主訴 : 歯並びがおかしい

基礎疾患 : 心室中隔欠損症, 喘息

現症 : 開咬, 舌突出癖, 慢性副鼻腔炎, 口呼吸

【処置及び経過】ワークブック「したのくせ」を使用し、毎日自宅で行う課題を月1回の受診で保護者に確認してもらいながら練習を行った。Case 1 はオープンアンドクローズを、Case 2 はサッキングを重点的に行った。

【結果および考察】

①Case1 においては吸指、舌突出が、Case2 においては舌突出等の悪習癖がみられなくなり、開咬の改善がみられた。(Overbite: Case1 -2 mm→0 mm, Case2 -2 mm→0.5mm)

②MFT は、本格的な矯正治療を行う前に導入することで矯正治療の妨げになる悪習癖を除去する効果が期待できるとともに治療後の安定にも繋がるといわれている。本症例のように悪習癖が原因であった場合は MFT のみでも不正咬合が改善してしまうことも示唆された。

【文献】口腔筋機能療法ワークブック「したのくせ」、高橋未哉子、クインテッセンス出版(株)(東京) 2002.